

Alg. Res. Fac. Sci. Hokkaido Imp. Univ., Vol. II, No. 2).

- 7) 新崎盛敏 (1946): 生物 1, 5-6.  
 8) 時田 鄂 (1938): 植物と動物 7, 7 [6 (1), 1938, 57].  
 9) SUNESON (1947): Notes on the life-history of *Monostroma* (Svensk Botanisk Tidskrift, Bd. 41, H. 2).  
 10) 瀬木紀男 (1953): ヒトエグサの「腐れ」に就て (藻類, 1巻, 2号).

## 海木耳について

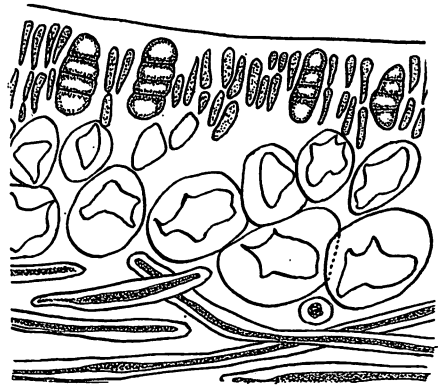
近江彦栄

H. OHMI: On a Formosan alga called  
 Hai-mô-yu or Hai-mô-loo.

1955年の7月末に大洋漁業株式会社貿易部神戸出張所に知人を訪ねた時、偶々陳列棚の商品見本の中に、台湾から輸入された海木耳なる素乾しの海藻が並べられているのが目につき、材料を少し分けて貰った。学校に帰ってから、この海藻の形態について少し調べる所があつたので、その結果を報告したいと思う。

この植物の乾燥品は黄紅色又は褐紅色をしていて、扁平な葉状をなし、枝は丸い腋で広開して叉状又は不規則に分岐している。体長は10~20 cm、幅2.5 cmに達し、枝端は鈍円か截形をなし、基部は楔形で小さな円盤状の根から短かい茎を生じている。縁辺は一般に全縁で平滑であるが、中には疣状又は乳嘴状の突起を有するものもある。

この材料中には成熟した雌性体と四分孢子体とが混つて見られた。嚢果は顕著な球状体をなして表面に突出し、直径が1.5mmに達し、葉の両面に散在しているが、特に両縁部に多く集つて作られる傾向も見られる。一方四分孢子嚢は体の表面に散在しネマテシヤをなしていない。四分孢子体の横断面を見ると、表皮細胞は2~3層



第1図 海木耳の四分孢子体の横断面 ×280

から成り、表面に直角に配列している。それより内部は径 $50\mu$ 内外の多角形又は不規則な形の大きな柔膜細胞の組織からなっている。更に内部の髓部は細長い繊維状の細胞が緩く縦に走り、又根様糸を伴っている。四分孢子嚢は有色の細長く伸びた皮層細胞の間に埋つていて、高さ $42\mu$ 、幅 $20\mu$ 位あり、環状に分裂する。

植物体の外観は一見して、カバノリに似ているが、髓部が縦走する繊維状の細胞からなる事と、四分孢子嚢が環状に分裂する点で明瞭に識別され、このような特徴は *Sarcodia montagneana* J. Ag. アツパノリ (日本藻類図譜 IV, 177-178 図版) と一致しているので、本種に同定して間違いはないものと信ずる。尚、日本海藻誌によれば、*Sarcodia montagneana* と *S. ceylanica* を同一種と見なし、後者を探る方がよいとしている。

さて、日本の中南部地方には、この属の植物は上記の外に、*S. cuneifolia* YAMADA ヒロハアツパノリを産するが海木耳は我が国に産する *S. ceylanica* とは一致するが、*S. cuneifolia* とは体形が明かに異なっている。

序ながら、漢語で木耳と言え一般にキクラゲの類を指すらしいが(樊恭烜氏の手紙に依る)、函館市在住の潘蓮夫氏の談に依ればクロバギンナンソウの類を海木耳と呼んで小料理用に供する由であるが、該藻は台湾に産する筈もないから、唯外形や用途だけから類似の海藻を此の名で総称しているのではないかと思われる。尚、輸入の目的や産地などに就いて大洋漁業株式会社神戸出張所に照会した所、大要次のような返事を得たので参考迄に附記すると

産 地 台北県淡水近海のみで採取される

採取時期 4月から6月迄の間

年間採取量 約2万斤(32万貫)

用 途 食用にもするが、一般向きではない。主に糊料とし以前は建築用にギンナンソウの代用として使われたが、現在は需要が少ない。

価 格 担(16貫)当りCIF約16ドル(神戸)。但し夾雑物5%以下を規格とする。

其の他の参考事項 台湾内に於ける需要は年5,000斤内外。従つて外国向けの輸出可能数量は15,000斤内外。

終りに御指導と原稿の御校閲を賜つた時田郇先生に深謝すると共に、研究材料を提供して下さつた大洋漁業株式会社貿易部神戸出張所並びに種々御

教示を頂いた同所の宮本方正氏に御礼を申し上げる。(北海道大学水産学部)

### Summary

A Formosan useful alga called Hai-mô-yu or Hai-mô-loo was proved by examining a sample to be identical with *Sarcodia ceylanica* HARV. A brief morphological description of the sample based on the writer's observation is given.

### 引用文献

- OKAMURA, K. (1921): Icones of Japanese algae IV.  
 (1936): Nippon Kaisô-shi.  
 YAMADA, Y. (1938): Notes on some Japanese algae VIII.

## ウミトラノオの薬効

中沢 信 午

S. NAKAZAWA: *Sargassum Thunbergii*  
 as a medicinal plant.

1948年の4月から9月まで私は浅虫の臨海実験所でのんびりと海を眺めて過したが、この間におこつた唯一つの忘れがたい事件がここに紹介する虎の尾さわぎである。

ちょうど5月10日、県庁・役場・会社など立派な人たちがそろつて浅虫へ集り、小学校を会場に海藻の講演や採集の指導などを行い、「海の虎の尾をとりましょう」と宣伝してサッと引きあげていつた。それには次のようなわけがある。

もと京城大学医学部におられた杉原德行博士および望月学博士はウミトラノオ (*Sargassum Thunbergii*) の浸出液がマクニンにおとらぬ蛔虫駆除効果をもっていることを見出し、これにもとづいて植村製薬会社がこの海藻からパンシー (Pansea) という錠剤をつくつて売り出した。杉原博士は戦後日本国内ではサントニンもマクニンも不足している事情から、パンシー製造に応援され、一方では青森県の海岸にウミトラノオがたくさんあるというので採集に努力されたわけである。

杉原・望月両博士のパンフレット「蛔虫及び蛔虫駆除に就いて」(1948)はその日会場内で配布されたが、それによるとウミトラノオは古くから朝鮮